横浜市立太尾小学校

学校だより

令和３年度５月号

令和３年４月３０日発行

＜　豊かに学び　ともに未来をひらく　太尾の子　＞

「學」から再考する「学び」

校長　　館　雅之

「指導」、「教える」、「勉強」、「学習」など様々な言葉が学校を語る上で使われます。私の感覚ではありますが、近年は「学び」という言葉が多く使われるようになっています。子ども主体ということからも「学ぶ」という言葉を使う文脈が導き出されていると考えます。

「学び」のとらえとして、「学」の旧字体「學」の成り立ちが多くの示唆を与えてくれます。

「學」の上部中心にある２ つの「メ」はそれぞれ「交わり」を意味しています。上の「メ」は学問や芸術・文化との交わり、下の「メ」は仲間同士の交わりを意味しています。このことから、交わりのないところでは学びは成立しないということがわかります。

また、この両側にある「ヨ」は大人の「手」を意味し、子どもの交わりに心を寄せる大人がいるところで学びが成立するということもわかります。

さらに、学ぶ主体としての子ども（「學」の字の「子」の位置からもわかります）は、建物を意味する「冖」の中心にあります。

保護者や地域の皆さん、教職員など周りの大人に包まれ、支えられながら、学問や芸術、文化などとしっかり交わることが「学び」であり、それを実現できる場が「学舎」である日々の「学校」だということがわかります。

さて、交わりを表している２つの「メ」のひとつである仲間同士の交わりは先生や仲間と一緒に考え、話し合い、協働しながら活動するという、本校が求める子どもの姿そのものです。

さて、「交わり」は今では感染拡大防止策を行った上でという条件はありますが、子どもの活動を見ると自然な行為のように思います。

１年生の教室では毎日が初めてのことばかりです。雑巾を机にかけておきますが、本校では洗濯ばさみを２つ吊してそれで雑巾を挟みます。洗濯ばさみには紐状の輪を付けて家庭から学校にもってきています。机のフックに付けるには、紐状の輪に洗濯ばさみを通します。先生は説明するとともに、やり方をやって見せますが、全員がすぐにできるわけではありません。私もその場面を見ていましたが、苦労している子どもに周りの子どもが自然に交わる姿が見られました。このような時によく「できた子は友達に教えてあげましょう」を言ってしまいがちですが、そのようなことは言わなくても子どもは自然に交わります。興味深いことは、友達の助けを必要にしているかどうか子ども同士でわかっているということです。

このような自然な交わりが生まれた背景は、先生が「座ってやりなさい。席を立ってはいけません。」と言っていなかったことにあると私は考えます。交わる状況をつくりだすことが周りの大人の役割なのです。これは、「學」の「手」の部分と言えないでしょうか。

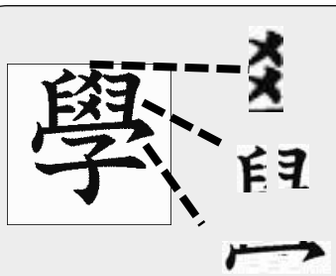
同じような行動は、避難訓練後のヘルメットを椅子に付けているカバーに戻す場面でも見られました。ヘルメットの向きやファスナーの使い方、さらにヘルメットは丸くて動きやすいということで、この時期の１年生にはなかなか難しい作業です。ここでも、自然に交わる姿が見られました。

子どもの生活は「学び」の連続です。「學」に込められた意味をもう一度かみしめたいものです。

雑巾を机につける場面

日常の学習の中でも自然に交わる姿は見られる。

ヘルメットをケースに戻している場面。複数の子どもの交わりがすてきな場面。



交わりを表す「メ」。上の「メ」は先祖との交わり、つまり学問、芸術、文化を意味する。下の「メ」は他者との交わりを意味する。

「手」子どもの交わりを包む大人の両手を意味する。

建物を意味する。冠の下の中心に「子」があることが重要。